



中条卓

明日への扉

Anima Solaris

明日への扉

中条卓

ぴーたーが戻ってきた。呼吸はまったく乱れていない。お面の下の顔は見る事ができないが、きつと汗さえかいていないのだろう。

「ただいま。他愛もない連中だった。半分石になりかけてたしな」

「唇に血がついてるよ」

いかにも世話女房といった調子でうえんでいーが駆け寄り、どこからか真っ白なハンカチを取り出す。乾きかけの返り血はきれいにぬぐい去られるが、ハンカチは白のままだ。例によって魔法を使ったのか、あるいはこれも何かのバグなのか。

「今度はどっちへ行くんだ？」

ぴーたーがこちらに向き直って尋ねる。声に少しだけ疲労と焦燥が混じっている。どこだろう？ ぐるりを見回しても何の目印もない荒野がひろがっているばかり。地図もコンパスもなく、どんより濁った空にはお日様の気配すらない。いや、待て。目を凝らすとかえってわからなくなってしまうが、はすかいに眺めると少しだけ空気の濃いところがある。

「あっち！」

沈みがちなパーティーの気分を盛り上げようと不必要に明るい声を上げてしまう。無言で歩き出す。このふたりの辞書には「休息」とか「憩い」とかいう言葉が載っていないらしい。

「それにしてもよお、『明日への扉』だなんて、そんなインチキくさいものが本当にあるのか？」

短剣で空中になにやら印を刻みながらぴーたーが声を張り上げる。

「知らないよ。ガセネタかも知れないけど、とりあえず探すしかないじゃないか」

うえんでいーがそっけなく答える。会話は何度も繰り返されてすっかりルーチン化している。

この世界から抜け出すための扉がどこかにあるらしい…その噂を聞いたのはいつ、どこだったろう。そもそもここには時間という尺度が存在しないから、いつという質問には答えようがない。経験値がまだ3けただったころ？ その経験値だってあてになりはしない。いつの間にかリセットされているからだ。でも、とりあえず探すしかないというのはほんとうだ。なぜなら世界の終わりが近づいているから。

先頭のぴーたーが無言で「待て」の合図を発する。今度はあたしの番だよ、身振りですう告げながらうえんでいーが胸の前で両腕を交差する。青い閃光がほとぼしり出て頭上の空間を切り裂く。姿を消したまま襲いかかろうとしていた**有翼獣**の群れが滑空姿勢のまま凍りつき、ばたばたと落ちてくる。その数約50。**有翼獣**は地面に落ちると安物の茶碗みたいな音を立てて砕け、そのたびに視野の片隅で経験値のカウンターが繰り上がる。うえんでいーが両腕をほどこいて空へ差し伸べると同時に地面からもうもうと蒸気が立ちのぼる。

「ごらんよ」

うえんでいーが指さすまでもない。そこら中に散らばっているのはみんな石化した**有翼獣**のパーツだ。耳、目玉、心臓、牙、しっぽ…かき集めたらちょうど一体分くらいになるのではないだろうか。

「ちっ」

ぴーたーパンのお面の下でぴーたーが舌打ちする。

「ところでどうしたんだお前、目から水なんか流して」
こちらを振り向いたぴーたーが驚きの声を上げる。

「え？ どうしたんだらう。なんだか目が変わんだ。なんて言ったらいいんだらう…」

「煙が目にしみたのさね」

うえんでいーが助け船を出してくれる。そう、そのとおり

なんだけど、この感じはなんて言うんだっけ。

「痛いんだ」

唐突に言葉が口を吐いて出る。

ぴーたーがひゅうと口笛を吹き、うえんでいーがかすかに首を振る。

森の奥にはお菓子でできた小さな一軒家があり、チョコレートレートの扉から白雪姫と7人のこびとが飛び出してくる。

電光石火の早業で喉を切り裂いていくぴーたー。床に倒れたこびとは7匹の子ヤギに姿を変え、白雪姫の皮の下からは毛むくじやらのオオカミが現れる。

「今夜はここで寝よう」

7つの寝台から夜具をはぎ取り、床に並べながらうえんでいーが宣言する。7つだった？ ということは白雪姫は毎晩こびとの誰かと寝ていたのか。

「明日は北へ向かうよ」

そんなことは言うまでもない。東西南北前後に上下、八方のうち7つまでふさがれたら残りは一ひとつしかない。残った一方を「北」と呼んでいるだけのこと。相手が白雪姫でもオオカミでもおんなじことだ。

「それにしても、いつからこんなことをしなくちゃならなくなっただ？」

ぴーたーは眠りのことを言っているのだ。いつから？ た

ぶん石化がはじまってすぐだろう。この世界には夜も昼もなく、誰も彼もぶつとおしでプレイしていたのが、ある時から周期的なシステムダウンが起きるようになった。最初の扉を開けたとき、それを「眠り」と呼ぶのだと思いついた。

「ねえうんでいー、またお話をして」

「なにがいいんだね」

「世界の始まりと終わりがいいな」

うんでいーの話は毎回少しずつ変化する。経験値のカウンターと一緒にいつの間にかひとめぐりして元に戻っているのかも知れないけれど。

「むかしむかしあるところに科学者の夫婦がいた」

「カガクシヤってなに？」

「神をも恐れぬ魔法使いと魔女のことさ。黙ってお聞き」

「うん」

ちんぷんかんぷんでさっぱりわからないけど、だからこそすぐに眠れるんだ。

「ふたりには子供がひとりあったが、ある時重い病気になってしまった。眠りから覚めないんだ。両親はあらゆる手だてを尽くしたが、子供は眠り続けた。やがて子供がおとぎ話とゲームの入り交じった奇妙な夢を見ることが

わかった。両親は子供の体を冷凍保存するとともに自分たちも子供の夢の世界に移住することにした。どうやって？子供の脳内の電気活動を正確にマッピングした仮想世界を構築し、そこにジャックインしながら少しずつ干渉していったんだ。当時すでに冷凍技術は確立されていたが解凍は不安定だったから、解凍方法と病気の治療法がふたつとも見いだされる未来までそうやって暮らしていくつもりだった」

暖炉で薪がはぜる音がする。それに混じってかすかな羽音。(シンパクスウ12でアンテイ：ユエキぽんぷセイジヨウにサドウチュウ) 誰かが何かを呟いている。

「だがそのふたつが見つかるまでには途方もない年月が必要だった。両親はとうにこの世を去り、そのアバターだけが仮想世界に生き残っている。その世界すなわち生命維持システムもはや耐用年数の限界を越えている。やむなく解凍作業が始まった。驚いたことに世界の解体が進むのと平行して子供に覚醒の兆候が見られ始めた。今、子供は両親のアバターとともにシステムからの脱出口を求めて世界をさまよっている…」

そしてパーティーは世界の果ての平原にたどり着き、そこで唐突にラスボスと遭遇する。そいつはお話の中の悪役をぜんぶごちゃまぜにした醜悪な怪物で、ニンクとタマネ

ギと血と汗のまじったような臭い息を吐きかけながら行く手に立ちほだかる。

(そうだがこれが匂いというものなのだ)

どこかでゴングが鳴り響き、天からは進軍ラツパがとどろく。短剣を構えて飛び出したぴーたーがあっさりお面を割られて仰向けに地面に転がる。お面の下には顔がない。何という悪夢！

うえんでいーが猛禽の叫びとともに最強の霊獣ゆにこーんを召喚する。だがラスボスは体毛のかわりに無数のクロミミズを生やした太い腕でゆにこーんの角をへし折り、首をねじ切つて屠り去る。

「きゃあっ」

悲鳴を上げるうえんでいーの服はラスボスの爪で右肩から左腰まで一気に裂かれ、裂け目から真っ赤な闇が吹き出す。ラスボスがゆっくりとこちらへ向き直る。逃げだそうとしてあたりを見回すが、平原は地平線から急速に石化しつつあり、いやそれどころか空間全体がくすんだ灰色の石に閉ざされかけている。息が詰まる。その時はじめて自分が息をしていることに気づく。

ラスボスが近づいてくる。表情はかげになつていて見えないうが、きつと噛っているのだらう。やつの背中までがすでに石に変わりかけている。

そのとき突然、倒れていたぴーたーとうえんでいーが起き

あがり、ラスボスの両足にしがみつく。ふたりはラスボスのへそに手をかけ、力まかせにこじ開ける。こんなことつてあるだろうか、そこには丸い小さな扉があるじゃないか。「これが扉：」

ふたりが同時に叫んでいるのだが、語尾は石になって聞き取れない。扉が開く。石の真ん中にぽっかりと暗い穴がある。もうそこへ飛び込むしかないが、その穴はやつと頭が通るだけの大きさしかない。

その時ようやくすべての記憶がよみがえり、子供は輝く情報の彗星となって闇に侵入する。

永遠とも思える旅の果てに光が見えてくる。

著者紹介

中条 卓 (Taku Nakajo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/t-nakajo.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/nakajo/door_index.shtml

著作：**在宅戦闘員**

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/serials/nakajo/index.shtml>

Sugar Room Babies

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/sugar/index.shtml

レゾナンス

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/resonance/index.shtml

夢のチョコレート・ツアー

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/nakajo/choco_index.shtml

フェイズ・シフト

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/nakajo/phase_index.shtml

あした とびら
明日への扉

2006年3月8日 第1版第1冊発行

著者 **中条 卓** (Nakajo Taku)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。